
手紙

ayu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙

【ZPDF】

Z0847R

【作者名】

a y u

【あらすじ】

もうすぐ親友の誕生日。

手紙が欲しいと言われ、『文をしたためる』という行為について考察してみる。

(前書き)

多くの方に楽しんで頂ければ幸いです。
こちらでも注意はしておりますが、誤字・脱字等ございましたら
一報ください。

『文をしたためる』と言つ行為について、ひとつ、眞面目に考えてみることにした。

自身の手で綴る手紙には、果たしてどのような意味があるのか。別に、手紙に限らずとも毎年年賀状やら暑中見舞いやら、定期的に手書きのものを送つてはいる。この行為によつて生じる、何か『特別』なものがあるからこそ欲しいと言つ要望が出るのだろうが、その『特別』とは一体何なのか。分からないが、取り敢えず手紙は書かなくてはなるまい。

というのも、遠く離れた地に居る友人に、「手紙が欲しい」とねだられたからである。

もうすぐ、彼の誕生日なのだ。彼は幼馴染で、親友。それこそ覚えていないくらい以前から、彼と私には関わりがある。そして、彼とのプレゼントの交換は毎年欠かさずに行つてはいる慣例行事のようなもの。いつから続いているものか、もう想いだすことすら出来ないくらいだ。そして当然ながら、遠く離れた今でも毎年お互いの誕生日になるとプレゼントを贈り合つてはいる。

十一月の、二十五日。

その日が、彼の誕生日だ。

クリスマスと重なる誕生日ほど虚しいものはないと彼はとても悲しそうに語るものだから、私は毎年『お誕生日おめでとう』と彼にプレゼントを贈る。そしてその日は一日『メリークリスマス』という言葉は絶対に使わない。けれど彼はとても我儘で、いつもこう言つうのだ。

生誕の日を言祝がれると言つのはとてもうれしい事ではあるのだけれど、このクリスマスと言つのも実は預言者イエズス・キリストの生誕の日である訳で、ああ、果たしてその言葉は僕に向けて

のものなのか、それともその預言者に向けてのものなのか。この十一月の二十五日、クリスマスと呼ばれるこの日に限っては日本に来た宣教師たちの事を少しばかり恨んでしまう。年の瀬の忙しい日に生まれてきた預言者に対してだって、一つ一つなら恨み言を零しても致し方のない事なのではないかと思えてしまう。何故なら僕は今まで君以外の友人たちに誕生日を祝われた事がないのだから、こう思ってしまうのは仕方がない事だろう？

十一月二十五日にパーティーをするからと伝えると、誰もが『クリスマスのパーティーだね』と言うんだ。そしてパーティー当日も『メリークリスマス』と言ってプレゼントの交換を求めるんだ。預言者と同じ素晴らしき日に生まれた僕の為にではなく、イエズス・キリストの為の祝い事を行うんだよ。身近にいるのは僕であって、彼ではないのに。ああそうだ。それから、クリスマスと誕生日を兼ねてしまおうと言う親にも実はもう随分と辟易していくてね、そんな見ず知らずの人の誕生日となんか兼ねないでくれよと何度も思つたとか。ほら、どんなに有名だからと言つて芸能人の誕生日会なんか個人で開いたりはしないだろう？ これも同じ事だと思うんだよね。ところで、僕は一度皆をパーティーに招き、自分はプレゼントを用意せずに待つていたことがあるんだ。そうしたら皆興ざめだと言つて怒りだしてね。確かにその日付を見れば勘違いをしてしまうと言つても頷ける事はあるのだけれど、僕はきちんと『僕の』誕生日のパーティーである事は伝えていたんだ。預言者の、ではなくね。にも関わらずそのような反応を示した彼らははつきり言つて無粋以外の何物でもないとそう思うのだけれど、どうだろう。

これはもしかしたら僕の傲慢以外の何物でもないのかも知れないけれど、当時の幼い僕にしてみればそれはとても重要なことであつて

云々。

全く、実に、面倒くさい。

ひたすらに続く彼の言葉達は、その一言に死せる。

そんな彼に、誕生日には何が欲しいかと、電話をしてみた。生憎と彼は近くに居ないものだから、欲しいものが分からなかつたのだ。幼い頃に遊んだ人形の類はもう必要ないだらうし、帽子や手袋、時計に至るまで装飾品を好まない彼にマフラーなど贈つても筆笥の肥やしになるだけだらうし、クリスマスの商品など以外だ。彼に合うものはそうそう見つからない。

それに時が経てば、場所が変われば、求めるものだつて変わつてくれる。彼に贈るものを考えるのは、酷く難しい。面倒なのは思考回路だけにしてほしい。でなければこんなにも悩まずに済むのに。

「ああ全く、しち面倒くさい人」

だから、電話をしてみた。誕生日には、何が欲しいのかと。他ならぬお前の生誕の日だ、少しくらい奮発してやつても良いぞ、と。少し高飛車にそう言つてみた。

『なら、手紙をおくれよ』

嬉しそうに弾んだ声に、そんなもので良いのかと問い合わせた。私の時には、彼は実に見事な簪を贈つてくれたのだ。それにつり合つような、何か美しいものをと考えていたのに。なのに彼は、手紙がいいと言つた。

「……手紙、ねえ」

取り敢えず、綺麗な便箋と封筒、そして切手を買つに行つた。

?

拝啓、我が親友殿。

書き出してみて、なるほど、と思った。手紙と言つものは随分とその相手に集中するものなのだな、と新たに気付く。

便箋、封筒を選ぶ所から始まり、文机に向かい、万年筆を手に取る。そして、綴る。その過程の中に、相手を想わぬ時間というのは少しもない。しかも、年賀状や暑中見舞いとも明らかに性質が違う。多くのひとの内のひとり、という形ではなくただ一人の為に綴られるこの手紙と言つものは、相手への想いを酷く、鮮明にさせるのだ。彼との想い出を、彼への想い入れを、心がひとつずつ想いだしていく。

これは確かに少々心地の良いものかもしれないな、と私は目元を綻ばせた。そして自分の誕生日の時にもひとつ手紙をねだつてみようと思案する。

とは言え、変化のない日常に居る私の書く文章だ。然して面白いものではない。何か大きな事件でもあれば話は別だが、そんな愉快な事など何ひとつとして起きていない。その為、書く内容はと言えば、ちらちらと雪が降り始めたとか、今年は大根を上手く漬ける事が出来たとか、近所に美味しい甘味屋が出来たとか、そんなくだらないことばかりに限定される。

果たして、これで喜んでもらう事は出来るのだろうか。
そんな事を思いながら、最後に彼の生誕を祝う言葉を添えた。

十一月二十五日。

貴方はこの日を忌々しいと言つて嫌うけれど、私は今日この日を心から喜びたいと思います。

この日は、貴方という私の最高の友が生まれた日です。どうかどうか、嘆かないで下さい。私は毎年、この日を心待ちにしているのですから。貴方の心からの喜びを、私は心から祈りましょう。他の誰かの記念日であっても、我だけは必ず貴方の生誕を祝い、貴方の幸福を祈りましょう。

またいつか、貴方と合い見えることがありますように

そこまで書いて、ああ、そうだともう一言書き添える。

追伸 そう言えれば、小さなこと私をお嫁さんにしてくれると言つていましたが、それはまだ有効でしょうか

なんて、書きながらちょっとだけ笑つてしまつ。ああ、手紙と言つのは随分と自らを赤裸々にしてしまうものなのだと思った。こんな言葉は、手紙でなければ伝える事など出来なかつただろう。口にする事の出来ないことでも文章なら書けてしまつと言うのは何とも不思議である。面と向かつては言えないような事を相手に伝えたいときには、手紙はとても便利なものなのかもしれない。

かしこ、と結んで、四折りにした。香を焚き染め、封筒に入れ、糊づけをして、切手を貼る。そして、ふつとひとつ息を吐く。こんなにも彼を思つていた事が今までに一度でもあつただろうか。いや、『あつただろうか』などと思いを巡らしている時点ではないも同然だ。

そう言えれば、彼と別れてすぐの時には、毎日少しさびしい思いをしていたよつて思つ。毎日、こつもどいかで彼を思つていた。それが一年経ち、二年経つ。居ないといつこの状況が当たり前になつてくると、思つ事などほとんどと言つて良いほど無くなつていった。劣化し、色の褪せた写真を見て、時折ほつ、と思つ出しだけ。

それが、手紙を書いているその時間だけは、別れてすぐの時以上に彼を思つていた。

なんとまあ、不思議な事。

ふふと笑つて、私は郵便局へと向かつた。そして、十一月二十五日ぴつたりに彼の手元へ届くよつにすることは出来るかと局員に問う。

「ええ、出来ますよ。クリスマスのカードか何かですか？」

局員の浮かべる人の良い柔軟な表情に、ああこれが、と彼の言葉を思い出す。

「いいえ、お誕生日の贈り物です」

そうですか、と局員は眉をハの字にして、少し申し訳なさそうに笑つた。

「それでは、十一月一十五日一度に着くよつ、責任を持つてお届けいたします」

よろしくお願ひいたします、とひとつ頭を下げ、郵便局を後にした。なんとなく、晴れやかな気分だった。

彼は一体、どんな顔をしてあの手紙を読むのだろうか。

思いながら、辺りを見回す。クリスマスのツリーやラリー、スやら、預言者の誕生を祝う街の景色は、目が痛いほどにきらきらと輝いていた。

「ああ全く、何が気に食わないのや」

田に痛いほどに輝きは、まるで全ての人が彼を祝っているようにも見えて、嬉しくて、楽しくて。今まで私は気付きもしなかった。彼は毎年、とても綺麗な、とてもきらびやかな誕生日を迎えていたのだ。元に戻らない緩んだ口元を両手で押さえ、私は家へと急いだ。早く帰つて、彼との思い出に浸るつと、

古い写真たちを引き出しの奥から引っ張り出さなくてはならないと、私は家へと駆けて行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0847r/>

手紙

2011年5月31日12時14分発行